

授業探訪

【建設システム工学科土木コースの 学外実習について】

今、室蘭工業大学では、学部では「学外実習（2単位）」、大学院では「インターンシップ（1単位）」という正式の授業科目を設定し、地域、諸企業・団体のご協力をいただき、実践教育の一環としてインターンシップに取り組んでいます。

今回の授業探訪では、建設システム工学科土木コース3年生に対して開講された「学外実習」の様子をお見せしました。

【マッチング】

インターンシップに関する最初の説明会は4月26日に開催され、3年生のクラス担任から具体的な派遣先が示されました。学生にとっては将来の就職先も考えながら、自分にマッチした派遣先を考える第一歩です。その後、個別の面談を行いながら派遣先を絞っていきます。そして6月4日の第2回目の説明会の後で、学生は希望する派遣先を決めました。希望が集中した機関に対しては学生とクラス担任の話し合いで調整を行い、土木コースに在籍する3年生59名のうちの41名、およそ70%の学生がインターンシップにエントリーしました。

【履歴書を書く】

派遣先が決まると、さっそく必要な書類づくりが始まります。学生が一番苦勞するのが履歴書の作成です。就職の際に用いる履歴書と同様の書式を用い、「なぜ、インターンシップを希望するか」、「自分の特技」、「これまで課外活動等で取り組んできたこと」、「自分の長所と短所」などについて書き込みます。A3サイズの履歴書を完成させるのに何日もかかります。クラス担任に2、3回添削してもらってようやく完成します。

【さあ、出発！】

前期の定期試験が終わった8月11日、インターンシップを行う学生全員が教室に集まりました。クラス担任からの説明のあと、1年前にインターンシップを経験した4年生から体験談を聞きました。派遣先で苦勞した話、内緒で聞いた会社の裏話など、いろいろ参考になる話で



した。そのあと41名が全国各地のインターンシップ先に旅立ちました。

【全員無事帰還】

8月下旬、41名全員が無事、室蘭に戻ってきました。いろいろな苦勞がありましたが、それを自分自身の力で乗り越えた自信を持って帰ってきたように見えます。

さっそく報告会に向けてのパワーポイントの作成です。パソコンに慣れていない学生はTA（ティーチングアシスタント）学生のサポートで何とかスライドの作成を終えました。

【報告会】

10月15日、16日の2日間に分けて、インターンシップの報告会が行われました。各自、発表5分、質疑2分の限られた時間ですが、中身の濃いプレゼンテーションと質疑が繰り広げられました。採点は土木コースの教員とともに、今年度はキャリアサポートセンター長の高井先生に加わっていただきました。

クラス担任としてのインターンシップの最後の仕事は、派遣先への御礼です。通常業務でお忙しい中で、学生対応をしてくださった派遣先には、パワーポイントのスライドをCDに収録し、礼状とともにお送りしました。

FD講演会

『多様化する学生への対応』～学生の不登校・休学とFD～

蔵本信比古先生（本学保健管理センター）の講演を聴いて

FDワーキンググループ：奥野恒久（共通講座）

2007年12月25日に、大学会館多目的ホールにて開催されました。蔵本先生の講演会を受けて、FDワーキンググループで講演内容をまとめ、構成しました。

[大学生の不登校]

先生方のゼミや授業に出ていて、休みがちな学生はいませんか？ 「どうせ、さぼって寝ているのだろう」と思ってしまいそうですが、アパートの自室で一人きりでふさぎ込んでいる、精神的な病気が発症している、そういうケースもあるようです。蔵本先生によると、「1割くらいの学生には注意が必要。自殺の危険性すらある」とのことです。

学生時代に失恋をして、約半年間、不登校状態になったものの、見事に立ち直り今では教員をしているという友人が私にはいます。しかしそれは昔の話。どうやら時代は変わったようです。今の学生、学校に行けない日々がつづく、授業からも友達からも「置いてきぼりをくった」ようになり、ますます登校というハードルが高くなっているのでしょうか。不登校状態が長くなると、当然、休学手続をとることになり、当人の人生設計への影響は「大」です。

ところで、本学において、1年間にどのくらいの学生が休学や退学をしているかご存知ですか。2006年度で、前者が75人で後者が68人と、両者を合わせると5%を超えることとなります。もちろん、退学をして新たな人生を切り開くことは、何も悪いことではありませんが、「不本意な形」での休学者や退学者がいることも事実です。

では、教員として、学生の不登校時にできることはないのでしょくか。いや、そもそも、私たち教員の対応が学生の不登校を引き起こしている場合すらあるようです。蔵本先生は、実際に休学した二人の学生の例（プライバシーに配慮し複数例をまとめたもの）を紹介しました。

[例1. 留年が原因で休学した学部生]

実験レポートを締め切りギリギリで提出したところ、教員にレポートの不備を指摘され、さらに「締め切り時間だ」と言われ、受け取ってもらえなかった。そのため卒研に着手できず、3年次に留年し翌年その単位だけとって進級し講座配属も決まったものの、やる気がわず2度目の留年となった。

[例2. 指導教員と合わず休学した大学院生]

研究テーマが、本来自分のしたかったことと違っていったうえ、思うような結果も出せず先に進まなかったため、指導教員にテーマを変えたい旨を話した。すると、教員より「やる気がないんじゃない」「研究の姿勢が甘いよ」「やりたくないからやらないんじゃない、研究なんかできないよ」「成果を出すまで、とにかくこのテーマで頑張らなければ」…、となじられるように言われた。

[求められるコミュニケーションスキル]

研究の厳しさを教えるのも、教育では？ という思いもします。「そんな姿勢なら、研究なんかやめてしまえ」といった厳しい言葉を、指導教員や先輩から言われたことがあるのは、おそらく私だけではないでしょう。

しかし、なのです。蔵本先生は、「ユニバーサルアクセス時代の教員には、コミュニケーションスキルが求められる。学生が、『自分の思い』を言葉にできないときは、教員の側から『相手の思い』を言葉にしてあげることが必要だ」と、言います。教員との関係で不登校になる、その原因は「コミュニケーションの不在にある」ようなのです。考えてみると、学生たちとよく話しているようでも、その学生が今どのような状況にあるのか、まで思いを馳せてはなかなかいません。こちらの思いや用件を一方向的に伝えることもしばしばです。また、学生と教員間、学生同士でのコミュニケーションは十分でしょうか。学生の不登校への対応というテーマでしたが、改めて私たちのコミュニケーションのあり方やコミュニケーションの場が問われているのです。



[コミュニケーションのコツ]

蔵本先生は、講演後、学生に扮する教員と約10分間、面談を実演しました。コツは、とにかく学生に心を開いて話をさせる、何かあったら「また話をしに来ていい」という印象を残すことのようにです。最後に、私の感想です。教員としては、精神的にも時間的にも丁寧に学生と

向き合える、それだけの余裕が欲しいものだ、と強く思います。

以下、蔵本先生が講演で使われた資料から、「学生との10分間コミュニケーション」という学生との面談のコツをご紹介します。

学生との10分間コミュニケーション

- ◎ はじめのひと言は？ ……あいさつ（アイスブレイク）「こんにちは。〇〇さんだね」
- ◎ 次のひと言は？ ……の前に、相手をよく見る……見えたら、見えたままを伝える

相手の様子	相手との距離		遠い 思った（考えた）こと
	近い 見たこと	<< 相手との距離 >> 感じたこと	
ニコニコして座っている	ニコニコしてるね	うれしそうだね	何かいいことあったの？
じつとうつむいている	うつむいてるね	緊張しちゃうね	どうかしたの？

- ・ 見えなかったら、何もしない（もしできたら）相手の呼吸を見て、それに合わせる
⇒ 相手のペースから始める
- ◎ その次は？ ……自由に会話する（自分ではなく、相手が自由に）
 - ・ 10分間で、秘められた内面の問題を探り出すのはムリ
 - ・ チューターとしての最大の役割は、「また話しに来てもいい」という印象を残すこと
 - ・ 自分ではなく、相手が自由になるような会話にすることが大切
- 「今日のこの10分くらいの時間を、どんなことに使ったらいいだろうか？」
「ボクから質問して、答えてもらうというのでいいのかな？」
「〇〇（入学、前回の面談）から今日までの間を振り返ってみて、どんなことがあっただろうか？」
「単位取得とか、勉強の方は、考えていたようにできたかな？」
「生活面で心配なことはないのかな？ 食べたり、眠ったり、十分できているかな？」「ほかに、振り返ってみてどうだい？」
- ◎ 5分経過した時点で ……会話を進める（直面化）
「OK、ちょっといいかい」
「君はいま、この大学の△年生だね。いま君が自分自身の課題だとか、どうにかしなければいけないと感じているようなかって、あるのかな？」
「学業面とか、生活面とか、何でもいけど…」（話題を制限しない）～アレ、コレあげてきたら、「アレだね」「コレなんだ」とまずそのまま聞く～「そのことで、何とかしようと、あなたなりにどんな努力をしてみたのかな？」
「ほかに、どんなことがあったら、あなたの役に立つかな？」
- ◎ 10分経過して、最後に ……相手にゲタを預ける
「ボクが聞きたいことばかり聞いてしまったけど、君の方で今日はこのことを話しておこうと思っていて、まだ話していないことはないかな？」
「君のことで、ボクがこのことも知っておいた方がいいと思うようなことはないかな？」
常に相手を起点に……相手は尊重されたと感じるー『何かあったらまた来てもいいかな』

【教室設備改善報告】

教育システム委員会WG (FD担当)において、18年度事業の一環として「教育環境と設備等に関する全学調査」を平成18年11月に行いました。平成19年2月に教員の皆様方に、調査結果の報告と今後の対応について文書でお知らせしました。その調査結果におきましては、各教室におけるプロジェクタ設置、および老朽化したプロジェクタの交換などが指摘されました。

平成19年度におきまして、N101、N104、N208、N301教室に新しいプロジェクタを設置しました。写真はN104における利用例を示したものです。ノートPCに接続するケーブルとプロジェクタのリモコンを、黒板の右下のボックスから取り出して利用します。今後とも、教員の皆様方のご要望になるべく沿うように、教室設備の改善に取り組んで参りたいと存じます。



教育セミナー参加者報告

平成20年1月12、13日の2日間にわたって札幌大谷大学で開催された「新しい工学教育を考える会」のセミナー「デザイン教育」ならびに「日本語コミュニケーション」に参加しました。講師は岡山大学の塚本真也先生で、受講生は大学教員のほかJR北海道社員が多数おられました。以下にその様子をご報告します。

[デザイン教育]：安居光國（応用化学科）

テキスト（「想像力育成の方法—JABEE対応の創成型教育—」森北出版）をもとに、岡山同大学機械工学科の学生同様の演習が進められました。

10年前から始められた「創成プロジェクト」のスタートの速さと積み重ねに感服させられたばかりか、教員側が未消化なまま創造教育をすると「モノづくりは貴重な体験だった」という教員の自己満足や学生の錯覚があるとガツンと言われました。さて、彼の言う創造性は天才を生み出すことなのだろうか、そうではありません。大学の教育の目的は、技術者や研究者の卵を育てることであると強く意識したものです。つまり、問題解決につながる・つなげる発想は、トレーニングできるものであるとのこと。

それは「メカニカル発想法」と呼ばれるもので、問題に対してさまざまな角度から着眼することから始まり、既成概念を「増長」や「縮減」させる。そして「逆転」「複数化」「定義変換」「消去」などといった発想変換法をやさしい例をとおしてトレーニングすることです。こうすれば実際の問題解決に、柔軟な複数解を得ることができる学生が育てられるそうです。

最後に、ストロー斜塔のチーム対抗戦がおこなわれ盛り上がりましたが（藤木チームの完全優勝）、残念なことに化学系の私は、「座屈過重」という魔法の言葉に折れてしまいました。

[日本語コミュニケーション]：

藤木裕行（機械システム工学科）

皆さんも毎年の行事として学生実験等のレポートで不可解な学生の文章に悩み、卒業研究のゼミで「その図面



は見にくい・わかりにくい！」と毎度毎度同じ指摘をし、さらに卒業論文・前刷りで怪しい日本語を一生懸命添削しているのではないかと思います。それは修士論文になっても程度の差こそあれそれほど改善されているわけではない、つまりその学習効果はあまり出てないのではないのでしょうか。

本セミナーは、同じ経験をしながらそれを何とか効率的・効果的に対処できないかと考えていた講師が、長年の試行錯誤の結果に導き出した手法を隠すところなく解説してくれたものです。

具体的にはこのような能力を身に付ける必要性の学生への説明法、また「なぜそんな面倒なことをしなければならぬのか」という学生からの反発への対処も含め、「知的な文章作成法」「図面の作図力学」「説得力のあるプレゼン技術」の3部で構成されており、特に文章作成法に多くの時間が割かれています。

このような能力は単なる講義では身に付かず学生が自ら経験・体験をしなければならぬので、時間をかければそれなりの効果はある、もしくは時間・手間がかかるのは仕方がないことであるのは基本的には当然なのですが、それをできるだけ教員の負担にならない工夫をし、また学生には実習により実体験をさせることにより、非常に効果的な教授法を提案しています。本学の全学生にもぜひ必要な能力・知識ではないかと思います。

編集後記

広報FDよりも2004年に第1号を発刊してから、早いもので今回で第10号となりました。これまでFDワーキンググループ（FDWG）の活動の柱である洞爺湖教育ワークショップや、FD講演会、その他FDに関する情報をお伝えして参りました。今後も皆さんのお役に立つ紙面構成を目指したいと思います。ご意見、ご要望がありましたら、ぜひ、お近くのFDWGメンバーまたは教育システム委員にお寄せ下さい。